反覆可能性の法
—デリダ有限責任会社と行為遂行性の問題—

宮崎裕助

ジャック・デリダの膨大な著作群にアプローチするにあたって、一九七七年の間に書き継がれた『有限責任会社』に対しジョン・R・サークルによってなされた批判に再応答している「有限責任会社」の公開書簡として発表された「後記」に述べられているデリダの思想の一部であり、また自律的でない外見で「主著」をなしえないようなものとしている。以下に見るように、デリダの思想に不可欠な導入的価値を与えているのは、哲学史上の立場、元々、現象学および存在論に始まる解釈学的ないしテクスト学的展開の一つと見なされる「寄生性」のロジックこそが、以下を示すように、ここで主要な問いを形づくるのだ。すなわち、デリダのいう哲学史史上的立場は、通常、存在論の本領を示すものとして、存在論（ontologie）と現象学（Phenomenologie）、等々。しかし、デリダの思想は、デリダの思想ととの緊張関係、存在論（Ontologie）と現象学（Phenoméne）等々。
「大陸哲学」と「英米哲学」という二つの顕著な哲学的伝統の対決という見方が正しいのか。一方では、文学、芸術、政治、精神分析……の横断であることを裏付けるかのように、デリダの言語行為論への介入は、現代思想に関心のない哲学研究者のみならず、他の多くの読者に対して説解の場を開いてきた。確かに言語行為論は、デリダがこうしたテクストに取り組む際の重要な役割を果たすこととなった。テクスト論を特徴づけるのに重要な役割を果たすこととなった「反覆」の可能性（反覆 india は以下で見るように反覆 india とは厳密に言えば近い存在）という概念（正確には「準概念」ととまるのが「署名、署名、署名、署名……の一部として、言語行為論の用語（パフォーマティヴ／コンスタティヴ、発語内在的ないし発語媒介的な力、使
用／役立）、言語／脳、等々）を積極的に援用している。その際これらの発語が、とりわけ「法の力」（一九八九九〇以降頑著なよう）、いわゆる「倫理／法政治的」主題系と密接に結び付くことに留意する必要がある。言語行為の側面においては、デリダの言語行為論の変形や再編成はデリダの言語構成の側面に限定されてはならない。
反覆可能性の法

反覆可能性のプロトコル

問題の核心への理解を深めるために、オースティン、サーリに対するディリダの応答を迫って行うことはせず、そこで再三侵されている。反覆可能性（リフレクション）という語に経って最小限理解すべき努力をもって、有限責任会社において前半部（オースティン読者再読者）でディリダが自身の言語論の枠組みを要約的に提示しようとする際に対応されてい

こうした反覆可能性を主題化する限りでは、言語行為論との関連は外在的なものにとどまることであろう。実際この連関は必ずしもディリダのテキストでは明らかなとは言えない（2）もしそれ以上のものでないとすれば、そ
それに応じて言語行為論のもたらす積極的な諸効果は失われてしまうだろう（後のデリダの言語行為論の積極的援用

はたなる戦略的転換でしかないということになる。だが、まさにこの関係を問うためこそ、まずは言語行為論の問

題系と混同することなくそこから独立にこの話を検討しよう。反復可能性とスピーチ・アクト、あるいはむしろ行

為遂行性との内在的連関を明確化することはその後の課題である。

そもそも反復可能性が取り上げられればならないのは、それが言語の非常に基本的な問い—言語とは何か、何

が言語を言語たらしめているのか—何をもって言語は存在し、言語は言語と見なされるのか、等々—に答えよう

うな言語一般の成立条件として第一に抽出されているからである。デリダによれば、この反復可能性において語

の言語を構成するはずの超越的論審級の最終的な不在である。すなわち送り手、受け手、意味、意図、規則、慣習、コー

ド、発信のコンテクスト等々の根底的不在である。どういうことか。

デリダはそのような不在においてもなお言語が存在することの限界的なケースを、次のようなエクリチュール

マーク、文字」の例を想定することによって喚起している。すなわちそのエクリチュールのコードは秘密の暗号

として二人の「主観」だけによって作り出され知られていたにすぎないほど特有な語法であるという。不在では、当

エクリチュールであると言えよう。すなわちそのマークは或るコード—たとえばそのコードが未知であり、また

言語的でないとしても、それは問題ではない—によって規整されている。確かに人は次の限りでそれはなおも

エクリチュールであると言えよう。すなわちそのコードは或るコード—たとえばそのコードが未知であり、また

の不在において、したがって究極的にはすべての「主観」の不在において、そのマークのマークとしての同一性

において自らの反復可能性によって構成されている、という限りにおいてである。”(38[7])。

この時には起源における
反復可能性の法

主観の（志向の不在、主観が規定したはずのコードの不在においてもなお、言語が言語として反復されるうる限
り存在するという可能性が示唆されている（解読コードの失われた暗号、未知の異言語、古代人（または宇宙人）
狂人……）の文字痕跡、等々。）

反復されるのは一見したところでは「マークとしての同一性」である。しかしいかなる先行する主観もコードも
前提しない同一性とは奇妙なものだ。実のところこの記号的同一性（意味のユニット）は、読み手が自らの解読コー
ド（読解規則）を同時に制定することで創出されるものである。この同一性はたんに盲意的にではなく、それを作る
のを見出すことで可能になっている。こうしてこのマークは依然として伝達可能で、解釈可能で、解釈再現可能
である（ゆえに解釈は存在する）。したがって、この場合、その「正しい」解読コードをアプリオリに前提でき
ない限り、むしろコードは失われたのでも限られているのでもなく、「構造的に秘密であるようなコードは存在し
ない」 pamphlet とさえ見なされねばならない。（なぜあらかじめかかる翻訳も存在しない。）

もちろんこのような限界ケースにおける解釈の成立、いわゆる通常のコミュニケーション状況（受け手と送り
手が理念上異にしており、互いの意図、意味、メッセージをすでに規約的に共有された言語的手段や媒体によって
伝達する、等々の想定）に対する反証を提供していると言うだけでは十分ではない。前述の不在を限界ケースに固
有の事態と見なす限り、通常の（理想化された）コミュニケーションでは家家されるべき偶発事として固い込むこ
とはつねに可能だからである。だが、そもそも限界ケースを「限界的」と規定したままで「通常の」場合から区別するという想定は維持しうるものだろうか。エクリチュールのこうした構造がいったん認められるならば、この

をたんなる偶発的な経験的不在としてではなく、書かれた言葉であれ話された言葉であれ、言語一般を機能させるための積極的な条件を成す構造的不在として検討する余地が残されている。

確かに「通常ケース」の場合、個々の言語的要素（音調、声、イング、等々）が経験的には多様な現象形態を持つにも関わらず、そこに貫通する一つの形式の同一性、種々のトークンを統一するタイプが同定されている。この場合の反復はむしろ言語を規約的に組織しているコード、それらを同定することのできる言語運用者の発語能力（コンピテンス）、あるいはそれらを賦活する主観意識の志向性、さらには

もしもこれでは「限界ケース」は説明できない。しかし、だからといってそれはたんに「通常ケース」に対置さ

く上の一見は、不在がマークの機能のなかに必然的に自らを書き込む限りにおいて、あらかじめ不在の可能性によって限界づけられる。発信者あるいは受信者の現前のことで、デリダの解釈の必要性に至る道が開かれるのではないだろうか？

このとき考慮されているのは、規約性や志向性といった語対比の古典的な要請の不可避性にかかわらずそれらを必然的に媒介するという不在の構造的可能性を、つまりむしろ、いかに不可避的であるとしてもそれらがつねに不在の可能性において機能し

ていること、あらかじめ不在の可能性によって限界づけられることによって構造化されているということである。

説明しよう。繰り返すが、ここで問われているのはそうした諸対比の経験的不在ではない。不在の可能性と言わ
反覆可能性の法
問題はあくまで不在が可能性として機能しているその構造である。「通常ケース」の通常性（つまりは意図や規約を可能性として示すされることは普通の事実である）という超越論的審級の権能は、こうした不在の機能に媒介されるここと主張されている。そのような不在である一方、逆説的にも「通常ケース」を範例化するのだと言わなければならない。実のところ、「デリダの脱構築的身振りを一貫して動機付けているのは、このような目的論的本質化された価値（意図の充実、規則随順の一致、コンテクストの飽和、等等）が、それにによって排除された従属的価値を自らの内在的構成要素としてつねに必要としており、その限りでこの「本質」（現象、同一、内部：）があらかじめ「非本質」（不在、差異、外部：）の可能性によって穿たれ、分割されることではじめて機能しているという過程を論証し続けることである。

不在の構造的可能性を考慮に入れること『エコノミー』の分析は、規約であれ意図『指向』であれコンテクストであれ、そのの価値を規範化し階層化することで体系化される伝統的な言語理論の構築がつねに到達されぬものとし、不正の構造の可能性を考慮に入れられたこうしたエコノミーの分析は、規範を求める用語理論の構築がつねに到達されぬものとし、不正の構造の可能性を考慮に入れられるという過程を論証し続けることである。
反覆可能性の法

こうしたことから、反覆可能性のあくまでも両義的な性格が帰結するだろう。「同一化する」「反覆可能性

なくしてはイデア化はなく、しかし同じ理由から（他化する）反覆可能性ゆえに、純粋なままだ全ての汚染を免れ

たイデア化というのももない。反覆可能性が同一性の可能性の条件であると同時にその不可能性の条件と言

われるのはこの意味においてであるが、まさにそれゆえにこそ自らが条件たことの根源性を失効させざるをえな

れない。根源は、根源としての価値を有し自己維持するためには、根源的に自らを反覆し他化・変質させねばならない

反覆可能性のパラドックス。実のところ、同一物の反覆ではない反覆でない故に、怪物をそら反覆という表現をして

義正しさで、結局は、何かが反覆されるのか、なぜ反覆するのか、といった根本的な問いには決して答えが

ないのである（もしこの差しあるマーケの非「現前の残証」、残んだことを余計なマークとして理解することが

奇妙な造語「残遺」、「残余」抵抗、再存立）が要請された困難を理解しないことになるよう（「反覆可

能性と呼ばれる何とかについて語るためには、我々はそれを名指し、同定し、記述せねばならず、そうすること

でもあかもそれが一つの対象であるかのように扱わねばならない。換言すれば、我々はそれを、それ自身が疑問に

付しているはずの仕方で把握せねばならなくなる）。だからこそ、ダーラはサーチを直接批

判せず、「署名・出来事・コンテクスト」がその効果においてむしろ命中し「toucher」理解されたと言え言のた
二
行為遂行性から遂行可能性へ

言語の超越的審覧における不在の構造的可能性は、それを説明するかにみえる概念（反覆可能性）の自己複雑化を消減不可能にする。このことによって蔽えられて、それによって肥えついてゆく一種の怪物（）が喚起されることはないだろう。

ゼンばかりに、相手を文字通りまるごと飲み込む体内化することに「快乐」覚え、それによって肥えついてゆく可能性（）をも消減不可能にする。このことが必要であるのは、「論理的決定が為されているのだということ」への最低限の認識である。言語行為論が、脱構築がそうと名指される以前において切り開いていた分析の空間は、まさしくこのような認識を可能にする次元として示されることになるだろう。

全面的スピーチ・アクト。オーステインが自ら「哲学史上における最も偉大で、最も有益な革命」（）と呼ぶことも辞さない言語行為論の主要な論点とは、まずみて、文脈の機能の条件を規定するために、ここでは限定的でなければならないが、次のような方向を素描することが必要になる。

（）全面的スピーチ・アクト。オーステインが自ら「哲学史上における最も偉大で、最も有益な革命」（）と呼ぶことも辞さない言語行為論の主要な論点とは、まずみて、文脈の機能の条件を規定するために、ここでは限定的でなければならないが、次のような方向を素描することが必要になる。

（）全面的スピーチ・アクト。オーステインが自ら「哲学史上における最も偉大で、最も有益な革命」（）と呼ぶことも辞さない言語行為論の主要な論点とは、まずみて、文脈の機能の条件を規定するために、ここでは限定的でなければならないが、次のような方向を素描することが必要になる。
さにこの「力」の喚起のうちに、古典的な真理概念（アデクワチュオおよびアリーティア）から免れることによって、二つの状況を産出しないし変形する。パフォーマティヴの構造を認めていたように、我々はここに反複可能な存在と行為性の並行性を解明するための手がかりを指摘することができるだろう。これは、パフォーマティヴの逆行的自己相対的かつ自己言及的な性格、自らがその都度構成する特異な現実を指示することができるだろう。というのも、言語に内属する反複的かつ自己相対的性質における構成、発想内的力そのものだからである。これは、パフォーマティヴの逆行的自己相対的かつ自己言及的な性格、自らがその都度構成する特異な現実を指示することができるだろう。これは、パフォーマティヴの逆行的自己相対的かつ自己言及的な性格、自らがその都度構成する特異な現実を指示することができるだろう。これは、パフォーマティヴの逆行的自己相対的かつ自己言及的な性格、自らがその都度構成する特異な現実を指示することができるだろう。
ないのである。しかしながら、逆にその不純性ゆえに、行為遂行性は、「所与」「既得」「自明」と見なされたコン
テクストや慣習性、社会性に必然的に関与することができ、そこに入りそうなるを動揺させ変形する契機を自身の
発語的な諸力として与え続けるのである。（27）
いかなるフォーマティヴの成否も一定の事実確認的言表として述べられる利を、このコンスタティヴそれ
自体もまたつねにすでに行為遂行性によって媒介されていたことで再び変形を蒙らざるをえない。そうした意味で
は、「成功したフォーマティヴゆえ存在している」ということ（28）（29）（30）
（31）（32）（33）（34）（35）
（36）（37）（38）（39）（40）
（41）（42）（43）（44）（45）
（46）（47）（48）（49）（50）
（51）（52）（53）（54）（55）
（56）（57）（58）（59）（60）
（61）（62）（63）（64）（65）
（66）（67）（68）（69）（70）
（71）（72）（73）（74）（75）
（76）（77）（78）（79）（80）
（81）（82）（83）（84）（85）
（86）（87）（88）（89）（90）
（91）（92）（93）（94）（95）
（96）（97）（98）（99）（100）
（101）（102）（103）（104）（105）
（106）（107）（108）（109）（110）
（111）（112）（113）（114）（115）
（116）（117）（118）（119）（120）
（121）（122）（123）（124）（125）
（126）（127）（128）（129）（130）
（131）（132）（133）（134）（135）
（136）（137）（138）（139）（140）
（141）（142）（143）（144）（145）
（146）（147）（148）（149）（150）
（151）（152）（153）（154）（155）
（156）（157）（158）（159）（160）
（161）（162）（163）（164）（165）
（166）（167）（168）（169）（170）
（171）（172）（173）（174）（175）
（176）（177）（178）（179）（180）
（181）（182）（183）（184）（185）
（186）（187）（188）（189）（190）
（191）（192）（193）（194）（195）
（196）（197）（198）（199）（200）

―84―
こと（いわば真面目さの所以を真面目に問わないことの不真面目さ、つまりは言語行為論自身の行為（倒錯）遂行性、そしてそれそのデリダが、すでに述べた身振り（テクストのエコノミー分析）、を通じて問題化したということを繰り返し事実確認的言表として示されるのは、どれほどまでに「暴力が政治的なものである他のどんなものであるか」「ディリダのテクストが、形を学びょうとして企てるものではあるにせよ、行為遂行性的構造的な不純性ゆえに、そのテクスト自身もまた決して中立ではありえない。したがってそこに書き込まれたもう一つの倫理性、別の行為遂行性が読み取られなければならわけではない。確かに『有限責任会社』において再読されるべきである（デリダ自身それ自身的程度意識しており、その文体を『二重のエコノミー』という刻明な記録、アカデミックな議論のコーデのもとに隠された（哲学的、倫理的、政治的）公理系を読まれるべきである）。

デリダのテクストが、形を学ぶようとして企てるものではあるにせよ、行為遂行性的構造的な不純性ゆえに、そのテクスト自身もまた決して中立ではありえない。したがってそこに書き込まれたもう一つの倫理性、別の行為遂行性が読み取られなければならいない。確かに『有限責任会社』において再読されるべきである（デリダ自身それ自身の程度意識しており、その文体を『二重のエコノミー』という刻明な記録、アカデミックな議論のコーデのもとに隠された（哲学的、倫理的、政治的）公理系を読まれるべきである）。
反覆可能性の法

リダサール論争、言語行為の現象学。勤務書房。一九三三、二九三五、二九八頁。なお、両者の間には注目すべき対立が存在している。議論の先取を含んでしまうが、簡単に見ておこう。野家がこの論文の結論部で「慣習」を論じている。しかし、反覆可能性の概念は、「慣習」を論じているのか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出しているのかどのように理解するかは、重要な問題である。

一方、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能性の概念を「慣習」から導き出すか、反覆可能
反覆可能性の法

（28）

1998年、ド・マンがデリダに先駆けていかにしてパフォーマティヴ概念の変形と再錬成を行っていたかについては、すでに私は論じたことがある。《約束のアレゴリイ＝政治としての脱構築＝試論》東京大学総合文化研究科一九八八年度修士論文、と

本稿は、駒場哲学協会二〇〇〇年度春期フォーラム（於東京大学駒場キャンパス、二〇〇〇年四月八日）において発表された原稿をもとに大幅な加筆変更を施して再構成されたことを付記する。